

Plasma TNF- α level before treatment predict subsequent remission in patients with depression treated with duloxetine.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-11-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 枝里子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10470/31553

主論文の要約

Plasma TNF- α level before treatment predict subsequent remission in patients with depression treated with duloxetine.

治療前の血漿 TNF- α 値は duloxetine により治療されたうつ病患者の症状寛解を予測する

東京女子医科大学大学院
内科系専攻精神医学分野
(指導：石郷岡 純教授)
鈴木 枝里子

【目的】

抗うつ薬として広く使用されている serotonin-noradrenalin reuptake inhibitor (SNRI) の一つである duloxetine を用いて、治療前の血漿 interleukin-6 (IL-6) 値や tumor necrosis factor-alpha (TNF- α) 値が最終的な症状寛解を予測出来るかを調べた。

【対象及び方法】

東京女子医科大学病院の外来及び入院患者を対象とした。選択基準は Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorder, Fourth Edition (DSM-IV) のうつ病診断基準を満たし、かつ MADRS 総得点 20 点以上を有する 18 歳以上の男女とし、現エピソードに前薬として抗うつ薬の使用のない者とした。試験期間は 16 週間で 4 週毎にうつ病症状を評価し、開始時と 16 週目に採血を行い、血漿 TNF- α 値と IL-6 値を測定した。Duloxetine の開始用量は 20 mg/日とし、臨床症状に応じ最大 60 mg/日まで増量可能とした。寛解を MADRS スコア 10 点以下と定義し、治療前の血漿 IL-6 値と TNF- α 値が 16 週目における症状寛解と相関があるかをロジスティック回帰分析にて解析した。また、年齢、性別、BMI、治療前の MADRS スコア、duloxetine 量、duloxetine の血中濃

度、現在のうつ病エピソードの長さ、初発か再発か、家族歴の有無についても解析し、症状寛解と関連性があるかどうかについて調査した。尚、この研究は東京女子医科大学倫理委員会の承認を得ている。

【結果】

同意が得られた 106 人の患者のうち、最低 1 回の臨床評価と採血が得られた 66 人を解析対象とした。単変量解析の結果、治療前の血漿 TNF- α 値（低値であること）、性別（男性であること）、年齢（高齢であること）が寛解と有意な相関を認めた。そこでこれらを説明変数として多変量解析を行ったところ、血漿 TNF- α 値、性別、年齢の 3 つが、それぞれ有意な相関を示した。

【考察】

治療前の血漿 TNF- α 低値は、selective serotonin reuptake inhibitor (SSRI) の効果を予測するという報告があり、我々の用いた SNRI である duloxetine においても、治療前の血漿 TNF- α 値は寛解の予測因子となることがわかった。また、抗うつ薬の効果に性差が存在するという報告はこれまでもなされており、今回はそれを支持する結果となった。最後に、若者に比し高齢者は、SNRI や TCA による治療効果が高いことが報告されているが、duloxetine 治療においては高齢者ほど寛解しやすいという我々の結果と一致した。

【結論】

Duloxetine の寛解予測因子として、治療前の血漿 TNF- α 値、性差、年齢が挙げられた。